赤旗　30年1月3日

生徒の願い 耳離れぬ

北海道「衆院5区の会」共同代表 宮田 汎さん(80)

「この年になって、新しい友人が次々できています。私の大切な『財産』です」。こう話して喜ぶのは、宮田汎（ひろし）さん(80)＝北海道江別市＝。「市民と野党共闘をすすめる衆院5区の会」の共同代表を務めています。

昨秋の総選挙で、逆流のなか、市民と野党共闘を前に進め、安倍政権を猛追し、共闘勢力が4割の議席を獲得した北海道。宮田さんは、札幌市厚別区や江別、千歳、北広島など5区の地域で共闘の先頭に立ってきました。

題字　金澤翔子さん

潮目は16年

2016年4月の衆院5区補選。当初、「自民党圧勝」といわれていた選挙戦は「市民の風・北海道」と日本共産党、民進党、社民党、生活の党（現自由党）の野党共闘が実現。統一候補の池田真紀氏（現立憲民主党衆院議員）が自民党候補をあと一歩のところまで追い詰めました。

樺太（現サハリン）生まれ。終戦直後、北海道へ渡りますが、祖父が乗船を拒否された小笠原丸は、ソ連（現ロシア）軍に攻撃されて沈没。船には宮田さんの同級生がたくさん乗っていました。担任の教員が新聞で教え子を探すものの、1人を除いて消息はわかりませんでした。「戦争は絶対だめ」という宮田さんの原点です。

『戦争する国づくり』

マイクで署名をよびかける宮田さん＝北海道江別市

そして総選挙です。宮田さんは街頭からメガホンで訴え、ビラを配りました。そろって宣伝すると、勇気がわいてきたといいます。

高校教員だった宮田さんは、教え子の顔を思い浮かべ、電話をかけました。受話器の向こうから「先生、覚えてくれていてありがとう」と返事がありました。家族で支持を約束した教え子もいます。

自衛隊に入隊した教え子や、親にも支持を訴えました。「先生、市民と一緒に平和のために頑張っている共産党に入れます」と約束した教え子から「海外で戦争をしたくないから、憲法を守ってほしい」と逆に頼まれました。教え子の願いが耳から離れません。

「共闘をして、今までお付き合いのなかった人たちと選挙でふれあい、友人になりました。力を合わせれば、政治は変えられると実感したのが、今回の総選挙でした。市民団体の『市民の風』の他の地域の人とも交流できたことがよかった」

研究執筆も

宮田さんは、「戦後レジーム（体制）からの脱却」を唱え「戦争する国」を狙う安倍暴走政治を止める活動と合わせて、戦前の暗い時代の国民弾圧を告発する研究者としての顔を持っています。

治安維持法犠牲者国家賠償要求同盟道本部の会長を務め、会が発行する機関紙「不屈」の執筆に徹夜することもしばしばです。

昨年暮れには、希代の悪法、治安維持法によって北海道帝国大学（現北大）や小樽高商（現小樽商科大学）、中国や朝鮮の学生が検挙、弾圧された事件を鋭く告発しました。

「教員の時は陸上部の顧問でしてね。生徒と一緒にフルマラソンに挑戦し、10キロ走ることが日課でした」と宮田さん。

「これがいま、元気に活動できることにつながっているかもしれません」。スリムな体にファイトいっぱい、活動に研究にと打ち込んでいます。

（北海道・熊林未来）

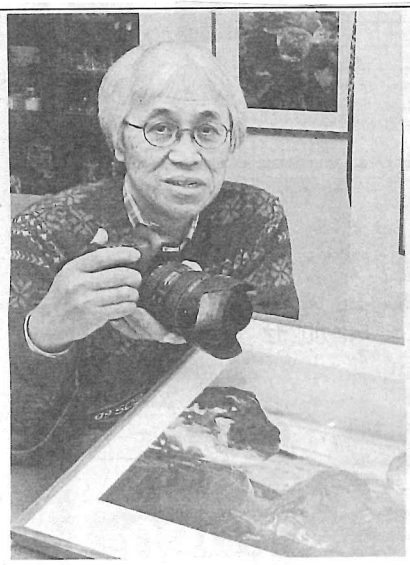
北海道新聞
29年12月31日
（朝刊）

※本学特任教授です

ひと 2017

ジュエリーアイスの名付け親

浦島（うらしま） 久（ひさし）さん



十勝管内豊頃町の大津海岸には毎冬、透明な氷塊がたくさん打ち上げられる。太陽の光で宝石のように美しく輝く「ジュエリーアイス」。今では多くのアマチュア写真家や観光客を引きつける存在になった。「命名した時はこんなに人気になるとは思わなかった。ふるさとが注目され、誇らしく思います」

豊頃町出身で小樽商大卒。大手電機メーカーに1年半勤めた後に十勝へ戻り、24歳の時に帯広で英語学校を始めた。自然写真家だった父甲一さん（故人）のハルニレの写真が、中学の英語の教科書に採用されたのをきっかけに、2009年秋から写真を撮り続けている。

12年2月、写真仲間に連れて行かれた冬の大津海岸で、その美しい光景に息をのんだ。とっさにジュエリーアイスという言葉が浮かび、自らのブログで写真とともにその名を紹介した。

その後、豊頃町が16年から公式にこの名を使うようになり、メディアの注目度が高まった。昨年1月にはニューヨーク・タイムズが「世界でも珍しい現象」と紹介。大手旅行会社も新たな観光スポットとして、各地発着のツアーを企画している。

間もなく、十勝川から流れ出した氷塊が海岸を覆う。いつ見られるかわからない自然現象だけに、2月ごろまでは帯広の自宅から極力毎朝通うつもりだ。

「住民の迷惑にならないよう、早朝の大きな話し声などは控えて、厳寒装備で楽しんで」と呼びかける。65歳。（米林千晴）